



## 海外生活 だより

パリ事務所

# Bonnes vacances!

## ～休むときは休む！フランスのバカンス～

(一財)自治体国際化協会パリ事務所所長補佐  
細川 和久(香川県高松市派遣)

フランスといえばバカンス。バカンスといえばフランス。日本の勤労者が誰しもうらやむ長期休暇システムですが、その実態はイメージとはやや異なっていました。そして、バカンスシーズンのパリ生活に変化は……。

### バカンスの歴史といま

1936年、当時の左派政権によって、1年間の労働に対し2週間の有給休暇が定められました。その後1956年に3週間、1969年に4週間、1982年に5週間と順次拡大され現在に至ります。もっとも、1982年の改正と、1998年の週35時間制導入は、労働条件の改善以上に、ワークシェアリングによる失業率改善の目的が強いとされています(注1)。

こちらの日本語情報誌「フランスニュースダイジェスト」によると、今年バカンスに出掛けたフランス人の割合は55%。うち7割強が国内、3割弱が国外へ。平均日数は2週間弱とあり、意外に短い印象です。1人当たりの予算は250～500ユーロ未満が27%、500～1,000ユーロ未満が35%。6割以上が、バカンスで1日1万円未満しか使わない計算になります。それではホテル代にも事欠くのでは、と思いきや、「家族や友人の家」での滞在が48%。もちろん海辺の高級リゾートを楽しむ人々も非常に多いのですが(ビーチが人で埋め尽くされた光景がテレビでよく中継されます)、「長いお盆休み」に近い過ごし方もかなりの割合を占めることが分かります。

### 閉店、閉店……

ある日のこと、アパートから一番近く、週に一度は通うパン屋さんの入り口に張り紙が。「夏休みのお知らせ 8月3日～24日 皆さま最高のバカンスを！」こんな感じで、パン屋・魚屋・ブティック・美容院などの個人商店は多くが閉店していきます。期間はこのパン屋さんのように3週間程度が多いようです。

個人商店はまだ良いのですが(パン屋についてはエリアごとに1か所は営業しなければならないというルールがあります)、全国チェーンのスーパー「カルフル」までもが休業していたのには驚きまし



大手スーパー・カルフルも夏季休業

た。ここは、パリでも屈指の高級住宅街で知られる16区に位置する店舗。観光地という訳でもないため、近隣住民のバカンス中は営業しても意味がない……ということでしょうか。

さらに驚いたのが、事務所最寄りの郵便局窓口まで閉まっていたことです。さすがに小規模窓口のみが対象のようで、張り紙には「近隣の対応店舗」の案内が書いてありました。また、自宅最寄りの郵便局は地下鉄の駅前にあるかなり大きめの

店舗でしたが、8月はかなりの営業時間短縮（通常8時30分オープンが10時から、土曜は1日営業が午後のみ）。郵便局は店舗数も多く日本より便利だと感じていただけに、ショックでした。



事務所最寄りの郵便局窓口は4週間休業

## メトロも……

何より困るのは、メトロやバスなど、公共交通の運行本数が削減されることです。パリのメトロは平日の場合、どの路線もおよそ2～4分ごとに電車が来て非常に便利なのですが、8月は本数が間引きされ、タイミングによっては7～8分待つ羽目に。バスも通常10分に1本のところが15～20分に1本となると、かなり使いづらくなってしまいます。ところがバカンスということでパリから全体的に人が減っており（観光客は増えますが）、朝夕の混雑具合は実際のところほぼ同じでした。絶妙の間引き加減にむしろ感心します。

また、大規模工事もこの時期に行われることが多く、今年はエッフェル塔へのアクセス路線でもある6号線が7・8月の2か月間にわたり部分運休となり、駅には戸惑う観光客の姿がいつもありました。しかし、生粋のパリジェンヌである語学学校の先生にこの疑問をぶつくと「パリのメトロが、パリの人のスケジュールに合わせて工事するのは当たり前」との答えでした。

## 海に行けない市民のために

そうはいつでもすべてのパリ市民がバカンスを取る訳ではありません。経済上そのほかさまざまな理由でバカンスに出掛けない市民に海辺の気分

を楽しんでもらおうと、ドラノエ前パリ市長時代の2002年に始まった「パリ・プラージュ（＝パリの浜辺）」。

今年もセーヌ川などに5千トンの砂を運んで作られた人工の砂浜に多くの人が集い、大人は日光浴、子どもは砂遊びを楽しんでいました。普段から天気の良い週末は公園で多くの人日光浴をしているパリ、このイベントは非常に好評のようです。

ただ、今年は特に8月が涼しく、パリ・プラージュ期間中（7月19日～8月17日）に最高気温が30℃を超えたのはわずか3日。「暑さ」をほとんど意識しないままに夏が過ぎてしまい、多少の寂しさを感じました。

## そして日常へ

8月最終週ごろから、テレビが「海岸天気予報」に代わって「上りの渋滞」を伝えるようになるとともに、朝の通勤時間、サラリーマンの姿が目に見えて増えてきます。9月2日には新学年もスタート。フランスでは、学校が必要な学用品のリストを保護者に提示し、始業前に1年分の学用品をまとめ買いするよう求めるのが通例となっており（注2）、どのスーパーも一番目立つところで学用品の販売キャンペーンをしていました。それでも店によっては品切れが相次ぎ、親は遠くのスーパーまで買い物に走り回り……と、金銭面だけではなくかなりの負担になっているようです。

今夏、がらりと変わった街の様子に、フランス人にとってバカンスがいかに重要かを（若干の不便さとともに）実感しました。有給休暇の未消化やサービス残業などの問題が叫ばれて久しい日本ですが、働き方あるいはライフスタイル全般について、まだまだ欧州に学ぶべきところがありそうです。

（注1）「フランスバカンス制度についての一考察」飯田芳也、城西国際大学紀要2008年3月

（注2）Les Echos 2014年8月25日付